

十八 世界遺産の閑却

新刊の広告に、「構造的不正義を正すにはどうすればいいのか。現代政治の核心を突く主題」を論じた「現代最高の政治理論家の一人、ヤングの主著にして遺著」という文があった。書名は『正義への責任』、広告主は信用すべき岩波書店である。著者を知らないが、読む価値がありそうだ。傾聴することにして、「訳者あとがき」から読み始めた。著者はI・M・ヤングというアメリカ合州国の政治哲学者という。著者が女性だからだろうか、二人の翻訳者も女性研究者のようだ。訳者(岡野八代、池田直子)が著者の考え方を紹介する文は次のように言う。長いけれどいくつか引用しよう。

不正義とは、非常に広範に社会にいきわたり、根づき、諸個人間の日常の相互作用、メディアによる情報伝達、文化的なステレオタイプ、そして官僚組織や市場原理を通じて、まさに「構造的な」抑圧である…。

政治思想とは、理想的な公正な社会を描くことではなく、いま声を上げることすらかなわない、いや、本人でさえそれが通常の配分パターンであるとあきらめているか

もしれない、不正義の被害者にとつてのリアリティを直視することを出発点とすべきである…。

共同体は、身体的特徴への反応や行動規範、リスpekタビリティ(市民的価値／体面)といった一種の文化的慣習や、社会／政治／法規範、そして階級、人種、ジェンダー、性指向といったさまざまなカテゴリーからできあがっている。

同じ構造が、異なる立場にある者に、一方には特権を与えると同時に、他方には危害をもたらしている、という事態こそが、構造的不正義なのだ。

当代流の言葉使いながら目配りの利いたこれらの文章は、ガタリの詩のように書かれた文書を読んだばかりのわたしには、すぐれた注釈のように見えた。ヤングの同僚だったという人の詳しい諸言も、この書物の正統さを語る。ガタリの軽騎兵のような論じ方とは異質だという予感はそのものの、新たな正義論を期待した。

第一章は、自己責任論の強い合州国で、ひき受けるべき政治的責任があることをテーマとして取り出し、第二章は、正義の主題として構造的な問題があることを論じる。次の第三章は、高名なH・アーレントを参照して、人を非難する「罪」とは区別して、「責任」

という言葉の定義づけをしている。そして第四章で、構造的不正義に対しては、社会的なつながりある者として、その責任を担うべきだという主張に収束させる。その理論的立場からいくつかの局面を論じることになり、残りの三つの章があらわされる。

著者は、地球化した世界での国境を越える責任にコミットする運動の事例で、事態の改善の方向を示唆している。自身もその種の運動にかかわっているようだ。たしかに、この書物のていねいな議論は、構造的不正義に対する責任についての理論を精緻なものにしていくし、道徳的な責任をひき受けるその姿勢を現代人は見習うべきだ、と思う。

この著作が労作だと同意するわたしは、しかし、「どうすればいいのか、政治の核心を突く」主張を聞いたという気があまりしない。広告文は誇大だという教訓をまた得たような感をぬぐいきれない。そういう感想が湧くのはなぜだろうか、考えてみた。

論述は、学会における論文の慣習に従って、先行する論者の議論を検討しながら進む。構造的不正義に対する責任を主題に浮かび上がらせるのに立論が必要なのは、合州国では所得が少ないのはその人の責任とされすぎるせいだろう。ほかの章でも、独自性を際立たせて論を進めるためには、現在の学会の論調に対抗する努力が必要だという事情が垣間見える。ところが、取り出された議論の多くはどこかで聞いたことがあり、各人の社会

的な位置に應じて果たすべき責任があるという主張のほかに、格別新しい論点は少ないように感じる。この書物に刺激をあまり感じないのは、そのせいではないだろうか。

正義と不正義については古くから論じられてきた。著者は政治哲学者ということだから、それらの正義論とそれに関連する議論とをよく知っているはずだ。それなのに、この書物では、近代以来社会科学の領域で積み重ねられてきた営為が、無かったかのように、はつきりとは触れられない。アーレントに注目しても、彼女の広い政治・社会論に正義を論じるときに重要な論点のほかにもあるだろうのに、アイヒマン裁判に関連する議論しか引かない。マルクスの名が出るが、不正義の構造に関する彼の理論は触れられていない。社会科学史からいえばごく最近の議論を検討するだけで、多くの偉大な先人たち——マルクスとは異なる考え方の人たちも含めて——が正義と政治について述べたはずの重要な見解に言及しない。断片的にすぎなくてもそういう見解をもれ聞いたことのあるわたしには、この書物の議論の仕方がもの足りなくて、納得がいかないのである。

わたしの感想は、著作の経緯を無視しているからなのだろう。多くの章が研究者向けの短編的な論考だったのを、手を加えて一つの書物にまとめたものようだ。だから、研究者の仲間うちではすでに古典的になった議論を省いている、とも考えられる。あるいは、

不正義の構造そのものを変革するという議論は、現在の政治哲学のテーマではないのだろうか。大きな書名が正義論を広く論じるかのように示唆するし、現代最高の政治理論家の著作という広告文も、政治という言葉のもつ広い意味合いの中で正義を論じていると期待させたが、成立の事情からしてこの書物は、構造そのものを改善する政治の動力学に踏みこまずに、正義論の一部を論じたものだったのだ。著者はそのことを認識していたと思う。政治や正義という重い言葉を軽く扱った広告文に、わたしが惑わされたのである。

しかしそれにしても、『正義への責任』というような大きなテーマの書物を公刊するのに、正義や政治についての基本的で重要な考え方に少しも触れないというのは腑に落ちない。正義についてこのような主張を新しく組み立て直さなければ不正を批判できないとしたら、現在の政治理論の学の方自体に疑問が湧いてくる。社会的な責任を無視する経済学者が主流になっている合州国だけのことなのだろうか。ひょっとしたら、社会科学全般のアカデミアで、古典に触れないで狭い議論に終始するという傾向が出ているのだろうか。大学の制度とキャリア形成の現状が学問の王道を問うことを忘れさせ、知的遺産が閑却されているのではないかと心配になる。ものを知らない老夫のただの杞憂であればよいが。

地球上に世界遺産に指定された人類の貴重な宝がある。美しい富士山が世界遺産に認定されたのは同慶の至りである。ところで、世界遺産は、貴重な自然だけでなく、文化的な価値も評価されて認定される。自然も破壊される危険があるのだが、文化はそれを大切にしなければ維持できないから、世界遺産という制度があるのだらう。ひるがえって、先人が積み重ねてつくりあげた無形の知的遺産こそ、忘れてはいけない世界遺産である。その最も重要な世界遺産は、われわれの意識の奥に活動しているのでなければ維持・発展させることができない。

二〇一四年処暑

たまたま読んだ書物についての感想から、能力をはるかに超えた難路に入りこんで、なんとも乱雑な文ができた。これがこの雑記帳で無理をしている者の実体である。